

# 日中科学技术

No. 51

1986. 6. 20

発行所

日中科学技术交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11

南新ビル6F TEL.(03)815-7241

## 加强中日科技交流 增进两国人民友谊

中华人民共和国国务委员 方 毅

有山兼孝先生曾两次来信，盛情约我为日中科学技术交流协会会刊《日中科学技术》撰写短文，因我日常事务缠身，未能及时应约，甚感不安。

有山先生是我们的老朋友，是日本物理学界的老前辈，又是一位开创中日科学技术交流新渠道的先驱。中华人民共和国成立之初，有山先生同日本著名物理学家、诺贝尔奖金获得者朝永振一郎先生一道访问我国，与我国科技界建立联系，并于一九六四年和坂田昌一先生率领日本科学家代表团来北京出席北京科学讨论会，毛泽东主席和周恩来总理亲切会见了他们。一九七三年有山先生在名古屋创建了日中科学技术交流东海恳话会，积极开展日中科学技术交流活动，一九七七年在东京成立了日中科学技术交流协会，这个协会作为日中科技交流的民间渠道正在发挥积极的作用。有山先生和以有山先生为会长的日中科技交流协会，广泛团结日本科学家，为中日两国科技交流做出了宝贵的贡献，赢得了中国科技界的尊敬和欢迎。我和有山先生相识十余载，曾多次见面。每当见面，有山先生那种兢兢业业，一丝不苟的负责精神，都给我留下了深刻的印象。

科学技术是点燃现代文明的圣火，它对社会发展和人类进步有着重要的促进作用，中国把改革和开放作为两大基本国策。加强国际间的科技交流与合作，是我国对外开放的重要内容，也是发展科学

技术的一条重要政策。科学没有国界，现代科学技术的发展更需要加强国际间的交流与合作。我们希望在科技合作和交流中，学习国外的先进技术和经验，促进科技界和人民之间友谊的进一步发展。

当前，中国人民正在为实现四个现代化努力奋斗。中国科技工作者在“经济建设必须依靠科学技术，科学技术必须面向经济建设”的方针指导下，为我国科技事业的腾飞和经济发展，日以继夜地工作。日本是我国的近邻，两国科学家和人民有着传统的友谊。中国科技界将一如既往地和日本同行加强和扩大接触，交流学术思想，互相学习，取长补短，共同进步。

回顾过去，瞻望未来，中日科技交流的前程是光明的。中日之间的科技交往，曾经走过了复杂而又艰难的历程。每当遇到困难的时候，总是在两国科学家和有识之士的共同努力下，清除障碍，继续前进。中日两国科技工作者，面临着攀登二十一世纪科学技术高峰的崭新形势，我们相信，只要中日两国科技工作者携手并肩，齐步向前，一定会为两国以至亚洲、全世界的进步与人民幸福做出新的贡献。中国有句古话“曲径通幽”，经过艰苦努力得来的硕果，更觉珍贵，美好。

祝愿日中科学技术交流协会兴旺发达!

祝愿中日科学技术交流源远流长!

訳文

## 中日科学技術交流を強化し、两国人民の友誼を深めよう

有山先生から、心をこめた二度のお手紙で、日中科学技術交流協会『日中科学技術』誌に短文執筆をご依頼頂きました。私は常日頃の仕事の忙しさからついお約束を果たせず大変申し訳なく存じます。

有山先生は、我々の旧い友人で、しかも日本物理学界の大先輩であり、また中日科学技術交流の新しい道を拓かれた先駆者でもあります。中華人民共和国成立の当初、有山先生は、日本の著名な物理学者でノーベル賞受賞者の朝永振一郎先生と一緒に我が国を訪問され、我が国の科学技術界とのつながりを打ち立てられました。1964年には、坂田昌一先生と共に日本科学者代表団を率いて北京科学シンポジウムに出席されました。その際、毛沢東主席と周恩来総理が親しく一同と会見されました。1973年、有山先生は名古屋で日中科学技術交流東海懇話会を創設され、日中間の科学技術交流活動の積極的な展開をされ、1977年には、東京で日中科学技術交流協会を設立されました。この協会は、日中科学技術交流の民間ルートとして積極的役割を果たしています。有山先生と有山先生を会長とする日中科学技術交流協会は広い範囲にわたって日本の科学者を団結させ、中日両国の科学技術交流に貴重な貢献をされ、中国の科学技術界の尊敬と歓迎を勝ち得ています。私は有山先生と面識を得ましてから十余年にもなり、幾たびかお会いしています。お会いするたびに、先生の事に当って勤勉に、注意深く、細事もおろそかにしない責任感、私に深い印象として残っております。

科学技術は現代文明に点火する聖火であり、また社会発展と人類の進歩に重要な促進作用を有するものであります。中国は改革と開放を二大基本政策としております。国際間の科学技術交流と協力を強化することは、我が国の対外開放の重要な内容であり、また科学技術発展の重要政策の一つでもあります。科学には国境はなく、現代科学技

術の発展には国際間の交流と協力の強化をさらに必要とします。私達は科学技術の協力と交流において外国の先進的技術と経験を学び科学技術界と人民の間の友誼をさらに一歩発展させることを望んでいるのです。

現在、中国人民は、四つの現代化の実現のために努力し奮闘しております。中国の科学技術者は「経済建設は科学技術に依拠し、科学技術は経済建設に目を向けなければならない」という方針と指導の下に、我が国の科学技術事業を飛躍的に高め、経済を発展させるために日夜仕事に励んでおります。日本は我が国の隣国であり、両国の科学者と人民は長い交流の歴史を有しています。中国科学技術界は、将来においてこれまで同様に日本の同学の士と関係を強化し、学术界想を交流し、互いに学び合い、長をとり短を補いつつ、共に進歩を図っていくつもりであります。

過去を回顧し、未来を展望すれば、中日の科学技術交流の前途は輝かしいものです。日中間の科学技術の交流は、これまで複雑で苦難の道をたどって参りました。困難に会うたびに両国の科学者と有識者は共に努力して障害を取り除き、前進し続けてきました。中日両国の科学技術者は21世紀の科学技術の高峰を登るといふ新しい情勢に直面しています。中日両国の科学技術者が手を携え前進しさえすれば、両国、ひいてはアジアと全世界の進歩と人民の幸福に必ず新たな貢献を齎らすものと信じています。中国に「曲徑幽に通ず」という古い言葉があります。艱難辛苦の努力をしたあと得られる成果は貴重ですばらしく感じられます。

日中科学技術交流協会がますます発展されることをお祈り致します。

中日の科学技術の交流がいつまでも続きますように！

中華人民共和国國務委員

方 毅

1986年5月30日

## 第 4 回 講 演 会

来る7月21日(月)本年度定例総会のあと、標記講演会が東京地学協会講堂において午後1~5時の間開催される。その講演題目と講師は次のとおり。(入場無料、各位の聴講を歓迎します)

「中国における科学技術の発展と国際交流」

中国大使館(科学技術担当) 参事官

張 宇 傑 (仮題)

張 宇 傑

「原子衝突分野での日中交流」

理化学研究所 原子過程研究室

渡部 力

「地震学の日中交流 10 年」

京都大学 防災研究所

尾池 和夫

「中国の水質保全と排水処理」

国立公害研究所 陸水環境研究室

須藤 隆一

### 〔 講 演 予 稿 〕

#### 原子衝突分野での日中交流

私どもの専門とする原子衝突分野での日中学术交流は、1979年に京都で開催された第11回原子衝突国際会議に、初めて中国から4名の代表が参加したことに始まり、歴史は比較的新しい。

それまで全く交流がなかったが、このシリーズの国際会議でも初めての参加で、吉林大学(清泉教授他1名)、中国科学院物理学研究所(北京・李家明教授)ほか中国科学院武漢物理学研究所よりの出席で、それぞれ論文も発表した。会議終了後、この時の組織委員長高柳和夫教授(当時東大宇宙研)と今後の交流を進めることについて意見を交換した。

1980年秋、私(当時東大工・物工)は遼寧大学の招待で1ヶ月間訪中し、同大で「気体レーザーにおける原子過程」について講義を行った。これに加えて、吉林大学原子分子物理研究所(葛清泉所長)で講演を行い、その後中国科学院物理化学研究所(大連)・大連工学院・中国科学院物理研究所(北京)・同化学研究所・北京大学・清華大学・北京師範大学を訪問した。

この際、吉林大学の葛清泉教授より日中学术交流について具体的な提案があった。それは、近く

理化学研究所 原子過程研究室 渡部 力  
組織される予定の原子分子物理学会の会合に、日本から代表者を派遣して講演を行ってほしい。また中国の若い研究者を日本へ送りたい。どちらも旅費は自国負担、滞在費は相手国負担でというものであった。

帰国後私はこのことを高柳教授らに相談し、無理のないところから始めようと、中国の原子分子学会から招待があれば、何人かは出かけることなどを決定した。

1981年米国のガトリンバーグでの第12回原子衝突国際会議にも中国から数名の出席者があり、葛教授、高柳教授らと日中学术交流について検討した。この後、高柳教授は葛教授の招待で訪中し、吉林大学・遼寧大学・物理研究所などで講義を行った。

1980年~82年に遼寧大学干文甲講師は、広島大学嶋海元教授のところに留学、原子衝突理論の研究を行った。干講師は、この研究により広島大学から理学博士の学位を得、帰国後遼寧大学でAtomic and Subatomic Research Groupを組織し、リーダーとして活躍している。嶋海教授は帰国した干講師(現副教授)に招かれ、主として遼

寧大で講義を行った。

1983年3～4月の5週間、私は東大工学部と中国科学技術大学の協定により訪中した。科技大の理論物理グループは、この分野での共同研究を強く希望していて、具体的な研究テーマの設定について詳細な討議を行った。その結果「M粒子散乱の原子過程」「イオン・原子衝突による電子剥離過程」の2つを研究テーマとすることにした。さしあたり、2年間理研の原子過程研究室と中国科技大理論物理グループで共同研究を行うことを決めた。

滞在中に理論的方法の検討を終え、プログラムコードを書き、テスト・ランを行うところまで終えて帰国した。その後は手紙の交換で、第9回原子物理学国際会議に論文を投稿、1985年秋には、島村勲副主任(理研)、唐島照介助手(東理大)と私が訪中、共同研究の実をあげている。

現在、共同論文2編が印刷されている(Phys. Review誌とNuclear Instrument and Method誌)。この様な形の共同研究はこの分野では初めてである。

1984年5月、中国原子分子学会が上海で第2回研究会(学会)を開催した機会に高柳教授、中村

宏樹教授(分子研)が出席、招待講演を行った。

1985年夏、かねてから高柳教授が提唱していた中日原子分子物理学討論会が、成都科学技術大学で開催された。日本側からは、高柳教授のほか鈴木洋教授(上智大)、中村宏樹教授(分子研)、蟻川達男教授(東京農工大)、松沢通生教授(電通大)、大谷俊介助教授(名大)と私が出席した。中国側からは約70名の出席があった。ここで日中の学問的交流について具体的に討論が行われた。

理論的研究はともかく、実験研究では今なお共同研究を行うには幾多の難問が存在する。その一つは実験技術に関する裾野の狭さであり、これを今後どの様に広げるかが大きな問題であると考えられる。

1986年5月、再び高柳教授は学術振興会の特定派遣事業により北京を中心に訪問中である。

私も9月に再び中国科技大ほかを訪問する予定で理研と北京物理研究所の間でも共同研究を進める機運にある。

最後にこの分野の今後の日中学術交流の展望について述べる予定である。

## 地震学の日中交流10年

### 1 最初の訪中

1974年7月9日、当時東京大学教授の浅田敏先生(現在地震予知連絡会会長)と名古屋大学助教授の志知龍一先生、それに私の3名は、中国への旅に出発した。中国科学院から、日本での地震学、特に地震予知の研究の現状を紹介してほしいと招待を受けての訪中であった。

戦後、日中間の地震学者の交流はこのとき以前にはほとんどなく、中国から機器調査団の教人が1960年代に一度来日したことを記憶しているくらいである。私たちの訪中の直前1973年に、米国カリフォルニア大学のポルト教授が北京を訪中し、「EOS」という地球物理学学会誌にその報告を書い

京都大学 防災研究所 尾 池 和 夫  
た。私たちの中国についての知識は、その記事によるものだけであった。

北京への直行便はまだなく、この時の旅行は香港、広州を経由する長旅であった。

例によって、北京ではたくさんの人々を前に講演を行い、故宮を見学し、茅台酒を味わった。北京で一週間をすごした後、私たちは河北省の邢台地区にある紅山地震台を訪れた。1966年に大地震が起こった所である。

私たちが、驚いたのは、この地震台のスタッフたちが、データをもとに討論し地震の前兆現象から判断した地震予報を、関係する中央機関に報告する、ということを知ったときであった。日本で

は地震予知の研究は進んでいたが、この頃、私たちに「地震予報」の内容を実際に役所に伝えるという概念はまだ生まれていなかった。

紅山の村のスピーカからは、批林批孔運動のローガンがくり返し声高に流され、妙に「地震予報の実践」の姿が強く印象に残った。私たち3人は、地震予報の事業を直接見学し、その内容を聞く最初の外国人であった。

## 2 海域地震予知の成功

1975年2月4日19時36分、遼寧省南部を強い地震動が襲った。地震はマグニチュード7.3で、营口・海城一帯が特に激しく揺れた。

大規模な浅発地震であり、かつ震源は人工密集地区の直下であった。そのため構造物には大きな被害が出たが、人命の損失はほとんどなかった。人々は、厳寒の広場に前もって避難し、映画を見ながらこの大地震を迎えた。工場では生産活動を中止することなく、地震発生直前に、かねてより準備してあった防災対策を実施した。

このときの震災予防処置は、地震予知にもとづく震災予防が組織的系統的に実施され、しかも大成功を収めた世界で最初の実例であった。

日本の地震学会は、この地震予報の成果を学ぶために、顧功叙先生（現在中国地震学会会長）をはじめとする専門家たちを日本へ招いた。1975年の年末に彼らは訪日し、海城地震発生までのデータや分析結果を詳しく報告した。

## 中国の水質保全と排水処理

中国沈陽市および北京市の科学技術協会の招待を受けて1982年5月中国を訪問して以来、留学生をお預かりしたり、多くの研究者、技術者と議論する機会を得た。これらの交渉を通して得られた中国の水質保全の現状と排水処理技術の動向について触れてみることにする。

### 1 水質保全

大都市内を流れる河川は、工場排水や生活排水が未処理のまま大量に流れ込んで著しく汚濁され、

### 3 地震研究者の往来

1976年に日本から地震学会代表団が訪中することになっていた。7月28日未明、唐山地震が発生し、今世紀最大の被害（死者23万8千人）を出した。私たちの訪中も次の年まで延期となった。

唐山地震に対して、地震予報は長・中期予報までは出されていた。中期予報によって進められた補強工事の効果が一部の地域には確かに見られた。しかし、短期・臨震予報はなく、多くの人命が失われた。

この地震をきっかけに、中国での地震予知研究は、基礎研究に力が入られるようになり、日中の地震学者の間に、専門分野ごとに交流の巾が広げられ、つっこんだ議論が行われる機会も年々増えてきた。進展の速度は大変遅いとはいえ、政府間で地震予知の研究協力の計画も検討されつつある。

今、中国の地震学界では、中堅の研究者の不足に悩んでいる。かつてソ連で学問を学んだ世代と中国で教育を受けて大学を出たばかりの世代との間の大きなすき間は、基礎研究の進展のために致命的である。この隣国の地震研究を発展させるために協力する能力も、また余力も私たちには充分ある。この力が発揮できるよう各省庁は予算措置をすべきである。それは、やがて近い将来、まちがいなく日本の震災予防に効果をもたらす投資ともなる。

国立公害研究所 陸水環境研究室長 須藤 隆一

BODおよびSSが100mg/lを超えているところもある。湖沼やダムの富栄養化も顕著であり、また大連湾や天津湾では赤潮の発生がみられる。しかし、これらの水域のなかでも河川の汚濁が深刻で、当面河川汚濁防止対策が急務と考えられる。

### 2 排水処理

中国では、急激な経済発展のため、排水量は年増大し、1981年で年間300億 $m^3$ である。これらの排水を処理するためには300億元必要である。

このため、水質の有する自浄能力を合理的に利用して、人工的な処理と組合せて、水質汚濁防止を図るようにする。自浄能力を最大限に利用するための環境容量の研究は、環境科学研究所で行なっている。

各工場の排水には、排水基準が定められており、これが守れないと工場閉鎖にもなるという。このため、工場排水処理は工場の経営にとって最も大きな関心事であり、優秀な技術者がこの分野の業務に携っている。特に経済的に安く、効率の高い処理法に注目しているが、現実にはこのような処理法の開発は難しい。

排水処理分野の関心の高い課題は次の通りである。

①各種処理法の長所・短所

②嫌気性処理（メタン発酵）の動向

③新しい処理法の特徴

④自然浄化を組み込んだ排水処理の問題点

⑤処理水および汚泥の再利用

⑥水温および有害物質との関係

⑦処理施設の管理技術

⑧排水処理の微生物学

3 協力体制の強化

水質保全および排水処理技術に対するわが国への期待はきわめて大きいものがあり、技術指導、技術開発への協力を強く要望している。個々の企業としてのアプローチだけでなく、処理計画や処理法の選択にまで適切にアドバイスできるような協力体制の確立が必要ではないかと考える。

## 日中交流ニュース

### 中国科学技術協会の 第3回全国代表大会に祝電

5年ぶりに開催される同協会第3回代表大会（6月20日～28日…一般・特別代表計2千名参加）に会長から次の祝電をお贈りした。

中華人民共和国 北京市  
中国科学技術協会  
主席 周培源 先生

中国科学技術協会、文三回全国代表大会を  
熱烈に祝賀し、大会が貴国の「四つの現代化」に  
益々大きな貢献をされると共に、日中科学技術  
交流の一層の発展に寄与されるよう祈ります  
一九八六年六月二十日

日中科学技術交流協会  
会長 有山兼孝

### 北京二七機車工廠劉曉蘭女史の

留学支援を終えて

事務局長 肥後孝

昭和59年11月4日成田空港に劉曉蘭女史を出迎えてから、本年4月27日東京駅での見送りを済ま

せるまで、本協会としての責任を精一杯果たして参りました。

序曲：中国革命の烈士長谷川テル（緑川英子）女史の遺児劉曉蘭さんの日本留学実現について、兄劉星留学（57.3.11～58.6.26 理化学研究所で電算機勉学、本協会招待受入）にならぬ実現させたいと、故野上茂吉郎常任理事のお口添えと経済的支援の世話人川田泰代女史の申出を、59年6月協会は承認した。そして川田女史は、曉蘭来日前の9月には百人委員会という団体を組織して、資金支援に立上られた。

昭和59年6月北京二七工廠への招待状発信以後の連絡から、留学先電気通信大学の入学許可その他、彼女の中国出国の報を受けるまで、ハラハラさせられた思い出が残っている。

劉曉蘭留学支援百人委員会：世話人代表川田女史は、彼女の留学生活の経済面の全てを支えるため、ダイレクトメールで懸命の募金活動を続けられた。本協会の用途指定寄付金口座には、延528名に及ぶ別項の浄財が寄せられた。母親長谷川テル女史を全く知らない沢山の日本の友人たちから支援の呼掛けに答えて届けられたご芳志のおかげで、彼女は留學生活を安心して過すことができた。「お会いしたこともない日本の皆様のお蔭で…。」

と涙を浮かべて感謝の気持を何回も彼女が洩らすのを耳にした。

歴史教科書問題などは全く異質な日中友好を心から願う相互信頼の絆は、事実を通して強化されることが理解できる。

一年半の東京生活：曉蘭さんは、「コンピューターについて何も分らなかった私は、電気通信大学で有山正孝先生のご指導のもとに、計算機基礎理論と生産管理用の言語を学び、帰国後の仕事のための基礎を打ち立てることができました。また…皆様のお蔭で、日本の立派な工場や、世界でも有名な国鉄指令室、学校、研究室などを見学させて頂き、母の祖国の先進技術に対する理解を深めました。本当に戦後日本の素早い急速な発展に驚き感銘しています。」と便りの中で述べている。

転進：折角訪日したこの機会に、日本語をさら

に勉強したいとの彼女の強い希望について、3月末ギリギリに、北京二七工廠から有山会長あてに、留学延長の要望がもたらされた。本会は、自然科学分野の研究連絡・協力などの交流が本当であり、結局奈良女子大学の中塚明教授のご指導による日本語の学習と研究について、百人委員会の世話人の一部の方のご協力を得ることとなり、私どもの身元保証責任を終らせて頂いた。

彼女は、いま母の学んだ学校で、改めて日本を知り日本語を勉強できることを心から喜んでいる

収支決算：こうした次第から、本年4月劉曉蘭留学資金の収支決算報告を、ご支援頂いた全員357名(2回以上ご芳志を寄せられた方には、受入月別金額内訳を添えて)にご報告申し上げ、お礼状を差し上げた。

次にこの収支計算報告の要項を参考に供する。

年度区分	59年度 59.9～ 60.3末	60年度 60.4～ 61.3末	61年度 61.4	備 考
項目				
I 収入の部	千円 2032	千円 2443	千円 (402)	
前期繰越金	—	198	(402)	
用途指定寄付受入	2029	2443	—	
a 誕生会参加 b 利子	b 3	a, b. 198	—	
II 支出の部	1834	2041	(613)	61年度分
1 留学関係費	1049	1339	(553)	奈良女大入学及決算
募金業務費	585	497	(60)	報告等
事務費	200	205		
III 収支差額	198	402	△211	不足分仮払

### 「統計物理・物性物理日中ワークショップ」に参加して

昭和61年4月8日から同月12日までの5日間、標記の会議がこの分野では初めての日中ワークショップとして上海復旦大学で開催された。会議の英語名はSino-Japan Bilateral Workshop on Statistical Physics and Condensed Matter Theoryである。中国側で7日間の滞在費と会議の諸経費を負担し、日本側は上海までの往復旅費

東京大学 理学部教授 鈴木 増 雄  
慶応義塾大学 理工学部教授 久 保 亮 五  
を弁じた。このため筆者ら2人は日中科学技術交流協会から旅費の一部の援助を頂いた。そのほかの参加者については井上科学振興財団からの援助などに依った。これらの御援助に対してここで御礼申し上げたい。

日本からは筆者らのほか、中嶋貞雄(東海大)、豊沢豊(物性研)、川崎恭治(九大)、上村 流(東大)、

一丸節夫(東大), 福山秀敏(物性研), 塚田捷(東大), 安藤恒也(物性研)が参加した。参加者の人選は中国側の希望そのまま, 顔触れが大部分偏っているが, 今回は準備, 調整の時間的余裕がなく, やむを得なかった。

中国側では, 復旦大学学長謝希德教授が自らオーガナイザーとなり, 陶瑞宝教授ほか, 復旦大学の方々が無事世話を下された。地元はもちろん北京その他から, 50名余の参加者があった。そのうち, 著名な人々として, 彭恒武, 郝相林, 方福康教授らがあり, 若い人々も多かった。さらにインドからS.Chandrasekhar教授が特に招かれ, またシンガポール, 香港からも参加者があった。なおワークショップの報告は, シンガポールのPua教授の肝煎りでWorld Scientific Publishing Co.から出版される。

ワークショップで取り上げたテーマは, 光学過程の量子的コヒーレンス, 巨視的量子効果と観測

の問題, 量子ホール効果, 半導体やグラファイトの電子状態, 電子局在状態, 臨界現象やパターン形成の統計力学, 表面物理など, 統計物理, 物性物理の広汎な分野にわたった。討論に必ずしも十分な時間があつたとはいえないが, それでもお互い, はじめての機会としては活発な交流の成果があつた。今後の交流の方法としては, もう少し絞ったテーマで集中的に行なうことが日中の世話人の間で話にでたが, 今のところはまだ何も決まてはいない。

感想: 数年前とくらべると, 中国における基礎研究の水準の向上はめざましく, 若い人々の意気込みが感ぜられる。現在, 米国などに留学中の人々が帰ってくるようになれば急速な発展が期待されよう。日中の科学者の交流をもっと盛んにしなければならぬ, とは誰しも言うことであるが, 易しいことではない。今回のワークショップは具体的な一つの試みとして意義深いものであつた。

## 中国訪問を終えて

### 1. はじめに

日中科学技術交流協会のご尽力により, 1986年5月19日より10日間, 中国有色金属工業総会社に招かれ, 訪中の機会を得た。

即ち, 同公司所属大学の非鉄金属選鉱精練分野における博士研究論文作成を担当する客員教授にご推薦いただき, その事前協議を兼ねて長沙市の中南工業大学を訪問した訳である。そして同校で実際に講義をし, 担当研究者達と種々討論を行ったので, その概要を紹介し諸賢のご参考に資したい。

### 2. 長沙市

ここは秦始皇帝が中国統一の時, 長沙都が置かれ, 漢代には長沙王が封じられたという古都で, 洞庭湖の南約50kmに位置し, いま人口約百万, 湖南省の首都である。1972年1月, 市の東北5kmの畑の中の小高い丘から発掘された馬王堆漢墓は漢代のもので注目を集めた。そこから筋肉に張りのある女性の遺体(身分はB.C.194年賦候に封じられた利倉の夫人)が発見され, 副葬品(彩色帛画, 絹織物, 竹筒, 漆器, 楽器など)とともに湖南省博物館に展示されている。

### 静岡大学名誉教授 佐藤 太一

なお湖南省は多くの革命家を生んだが, 辛亥革命の指導者黄興も長沙出身であり, 故毛沢東主席(出身は韶山)が青年時代に学び革命運動に入ったのもここで, その史跡も点在している。

市は南北に流れる湘江により二分され, その中央には長さ4.75kmの細長い中洲(橘子洲, 市140m)が横たわり, 長沙の地名もこれに由来するといわれている。

市の中心街は湘江の東側を占め, その西側に中南工業大学が湖南大学, 湖南師範大学, 長沙冶金専門学校(有色金属工業総工司所属)などとともにある。空路は北京, 上海を始め主要都市と結ばれている(北京から2時間30分, 上海から2時間広州から1時間40分)。日本からは上海経由が近いようであるが, 定期便の運航は週1回なので週4回運航の北京経由の方がずっと便利と思われる。

### 3. 中南工業大学

中南工業大学は1952年11月1日に中山大学, 武漢大学, 湖南大学, 広西大学, 南昌大学, 北京工業大学などの地質, 採鉱冶金, 鉱山学科が骨格となって設立された。現在は地質, 採鉱, 冶金, 材



料科学工学, 機械工学, 自動制御, 化学, 管理工学, 外国語の9学科に分かれ, そのうち5部門に博士課程が設置されている。学生数は5,000人で大学院生は260人, 通信学生は520人に及ぶという。

職員は約2千名で, その中に教授と助教授合わせて160名, 講師と技術者約1,000名が含まれる。例えば冶金学科は教授5名, 助教授18名, 講師60名, 助手10名, 技術員15名, 学生300名から構成されている。

研究部門には粉末冶金, 地質, 採鉱, 非鉄冶金 W-Mo 材料, アルミニウム箔工学, 自動制御などの研究室が所属し, 電算機および分析センターが設けられ, 2つの付属工場が設置されている。そして図書館には61万冊の単行本と4,000冊以上の学術誌が蔵書として保管されている。なお大学のキャンパスは敷地0.73 km<sup>2</sup>に25万m<sup>2</sup>の建物が散在している。

#### 4. 講義

##### (1) 専門関係

筆者の行なった講義は①“水酸化アルミニウムの熱分解”, ②“水溶液からの金属の溶媒抽出”, ③“無機及び有機アルミニウム塩の熱分解”, ④“溶媒抽出系で生成する高分子量アミンの金属錯体の熱分解”の4題目について, これらを2日間に分けて実施した。すなわち1日目(5月23日)は①および②を, 第2日目(5月24日)には③および④をそれぞれ一緒にして説明した。

第1日目はアルミナ関係の講義であったが, 中南工業大学でもアルミニウムの製錬用のアルミナの生成をダイアスポアを原料として検討しているため, 約60人位の方が聴講された。8時半から11時半まで約3時間の講義を行ない, 午後は15時から18時まで午前中の講義の補足説明や質問を受けたセミナーを実施した。

第2日目の金属の溶媒抽出の講義は湿式製錬に関連しているため約100人以上の方が聴講された。午後は17時半から夕食時間30分を挟んで21時半まで質疑応答を中心にセミナーを行なった。

講義に対する出席者の聴講態度は実に熱心で, 古き良き時代の(以前の)我が国での教室風景が思い出された。当初は英語で講義をする予定であったが, “英語でも日本語でも通訳が必要であるので

寧ろ日本語でお願いしたい。”という大学側の要望により日本語で講義を行なった。しかし通訳は外国語学科担当の先生が行なうため, いずれの場合も講義の前日約2時間は頻度の高い専門術語を通訳の先生に予め説明する必要があった。

なお中国での英語の講義は英語教育の重点が読解力の育成にあるため, 当初考えていたよりも必ずしも一般的ではなく, 最近では日本語に対する関心がより高いように思われた。また質問は欧米諸国のようにその都度行なうという方式ではなく, 我が国と同様に一応全体が終了した後に行なう形式であった。しかし講義終了後の質問は活発であり, かなり実用的な問題に関連した提案があった。さらに各研究者の個々の題目に関する質問が多いので, かなり巾の広い対応が必要とされるようである。

特に私の関連分野では研究に対するセンスが必要なもので, それぞれの研究に対する把握と適切な見通しのアドバイスが要望されることを痛感した。そのうえ私の場合は発表論文を通してその内容に関心を持っている研究者が多く, 次々にいろいろな質問が提出されて非常に興味深かった。

一方, 現在長沙付近は鉱物資源の産出が豊富なので, それらから種々の金属の分離精製が重要課題の一つとされている。故に私の従来行なって来た金属の溶媒抽出関係の研究には大きな関心が寄せられ, 同様な分野の研究を行なっている人達を含めてこの方面の問題に対する関心は高かったように思われる。

##### (2) 日本語関係

最近の中国における日本語学習は盛んで, 筆者も特に依頼され5月24日の午後2時間(15-17時)日本語の講義を行なった。初めは日本語を勉強している学生諸君との座談会というように聞いていたので簡単に出席した。ところが出掛けて見ると“佐藤教授熱烈歓迎”と黒板に大書され, 教室一杯に学生諸君が集まり, 日本語担当の先生方も全員出席されていたのには驚いた。

中南工業大学での外国語学科における学生数の割合は英語:日本語は38:40で英語と日本語の学習志望者数はほぼ同数であるとのことだった。

職員数は日本語系で8名(含助教授1名)なの

に対し英語系は56名(含助教授6名)で、その他はロシア語系3名(含助教授1名)、ドイツ語系3名、フランス語系1名というように、日本語と英語の学習に主力が注がれている。そのため日本語教師が不足しており、適当な人材が日本に求められている。

それ故筆者は学生時代の国漢文の知識を基にして、a:日本語と中国語の相違(発音と意味)、b:日本語の種類(方言)…東北弁、東京弁(標準語—江戸弁)、関西弁、九州弁など…、c:日本の服装等について話しをした。講義後約30分間種々の質問を受けたが、その中で「日本の若者は中国に関心を持っているだろうか」という質問は印象的であった。学生諸君の一致した意見は「日本語は発音は難しくないが、表現は実に難しい。同じ言葉でも意味が全く違う場合があり、また敬語の使い方もなかなか判りにくい」ということであった。

#### 5. 客員教授招聘関係

中南工業大学で現在客員教授の受入予定の専門は固体物理・函数論・計算機管理・自動制御、湿式冶金・岩石力学の各部分であり、計算機管理(講義のみ)以外は講義と研究生指導の両方が要望され、湿式冶金(含博士課程)以外は修士課程の指導が主に望まれているようである。さらに筆者が副学長の劉教授にお会いした際、熱管理(冶金工程への熱エネルギーの適用)関係の客員教授

の招聘も考慮されていることを知った。

他方最近米国からアジア志願者協力協会の紹介で数名の方が来られたようであるが、これらの家族の人は全体で炊事を交替で行ない経費節約をばかり、その余りを中国各地の旅行費用に当てているとのことであった。一般に客員教授初め大学への訪問者は招待所(ゲストハウス)に宿泊するが、形式はホテル的で食事は食堂へ行き部屋には専用のバス・トイレがあり、ウインド型のクーラーが設置されている。長沙は8月には最高40℃位に達するとのことで、その時にはクーラーがかなり活躍するであろう。私の滞在中にも気温が日中30℃を越えたのでクーラーのブルンブルンという音の厄介になった。しかし普通の家庭まではクーラーは普及されておらず、扇風機の使用が一般的のようである。そのため大学の購売部にも扇風機が展示されている。

#### 6. おわりに

以上筆者が中南工業大学を訪問した折の状況を中心に簡単な報告をまとめてみた。必ずしも全般的ではなく、かなり誤謬を含むかもしれないが、昔の日本の学校教育の良さが中国の大学には残っていることを知って、実に喜ばしく感じた。

筆者もできればこのようなところで次の時代の人材育成に微力を尽したいと考えている。

野上茂吉郎記念文庫基金(略称「野上基金」)

## 募金の御協力有難うございました

敬称略・受付順

(受付期間 61年4月16日~6月15日)

寄附者芳名簿	田中フミ	河原林 胡	河野 哲子	宇野良 晴	鈴木 興志	飯島 俊吾
中川 良一	ラックシステム	原田 実	勝守 寛	青木 繁	竹中 規雄	矢崎 和盛
水野 幸夫	エンジ=アリング機	後野 攝郎	藤田 道子	小林 晃	宮本 精楼	鈴木 昭彦
宮原 義一	前郷 龍史	原 もと子	岸木 照夫	藤井 保彦	安倍 浩二	本田 直文
西島 均	上原 淳道	原 光夫	丸森 寿夫	大西 直毅	池田 清美	鈴木 洋
合 弘	吉野 翁吉	原 昭夫	小林 隆夫	土屋 喜一	安井 弘	久萩 正人
神 喜久雄	金沢 秀夫	原 泰夫	小林 源一	大川 幸哉	西田 嘉彦	早川 幸男
鈴木 武彦	寶来 正子	松村 龍	田中 朗子	有山 正孝	江尻 宏泰	磯井 敬
神田 幸則	田岡 忠美	小林 翁道	国方 隆	坂本 弘明	井上 健男	長谷川 成二
御子柴 寛夫	田上 嵩	江口 鉄男	寺澤 徳雄	山田 勝夫	野矢 弘	長谷川 澄江
田中 敬二	玉木 英彦	八田 豊明	武藤 富上子	高良 和武	前沢 重成	
田中 マツハ	監 具 博義	篠原 健一	江夏 弘	森 昭彦	河井 直幸	

## 13年ぶりに中国を訪問して

名古屋大学名誉教授 桐原朝夫

5月10日から2週間、1973年以来13年ぶりに中国を訪問しました。上海で電気化学協会溶融塩委員会と中国溶融塩委員会の日中合同の「第1回溶融塩化学と溶融塩技術のシンポジウム」に出席し、そのあと長沙の中南工業大学で講義をするのが目的でした。

実は、昨年有山先生から「中国の大学の製錬関係学科で博士等の学位論文指導客員教授の派遣要請を受けているので応募してはどうか」とお話がありました。私はこの方面の研究は10年以上前に研究費等の関係から中断し、13年前に中南鉱冶学院の人々とチタンの溶融塩電解について夜まで討論したこともありましたが、周囲の反対を押して応募しました。

客員教授の件は、私の日本での仕事もありますので隔月で年4~5ヶ月間を3年間、途中の往復の費用は給与から自弁するつもりでした。給与が2~3千元/月(60%兌換券)ならば何とかできると考えておりました。しかし、今年になって中国は外貨事情が悪くなり、宿舍等の現物支給で、800~1千元程度という話を聞き、先ず事前協議を兼ねて、長沙へ講義に行き、帰路北京の有色金属工業総会社に立ち寄りお話を伺うこととして出発しました。

上海のシンポジウムは日本側15人、中国各地から35人で、中国科学院上海冶金所陳念貽教授がホスト役を努め、全員が会場のある嘉定賓館に泊り11日の日曜日から4日間活発に催されました。中国側の優れた発表もあり、研究者層の厚いことに感心しました。良い仕事をしている人は、日本その他の計測器を使っておりました。

自由討論、蘇州へのバス旅行を通じ研究者間の親しさも増し、予想以上の成果があったと思います。ちなみに費用は上海復復11万円弱、嘉定賓館(公的施設)は4泊5日3食付で1万4千円、参加費100ドル(バス旅行・観劇・晩宴会等の費用込

み)でした。2年後に日本で働く事を考えると幹事の先生は頭が痛いようでした。

上海から長沙へは汽車でした。(飛行機は日曜1便だけとのこと)大学の外事所副所長の地質学科王副教授が3日前にわざわざ迎えに来られました。上海~長沙間は1,187 km、東京~福岡間程度で26時間かかります。しかも長い列車が満員で、3日前では軟寝台は取れず、杭州でやっと軟寝台に換えることができてホッとしました。単線、あまり速くないので思った程疲れませんでした。鉄道は13年前と殆んど変わっていないようです。

長沙は湖南省の省庁所在地ですがタクシーは少く、それにしても女性の服装が大都市上海とあまり変わらないのに驚きました。

大学の冶金学科を見学しましたが、上海の科学技術大学に比べると設備も古く研究も活気が感じられませんでした。しかし、大学の研究室で50 cm程のタンタル焼結棒を作り研究しているのには、一寸驚きました。

講義は4回位予定していましたが、冶金学科の大学院学生と講師を対象に2回、溶融塩からの電析反応(銀、ジルコニウム等)とチタンの溶融塩電解の話をしました。

丁度その折、有色金属冶金物理化学第1回年会を開催中であり、そこでの講演を依頼され、「チタンとジルコニウムの電解法」について一般講演をしました。学生は熱心に質問もありましたが、13年前の熱気は感じられませんでした。前回の誰かに会えるかと期待しましたが、他へ移っているようでした。しかし、上海のシンポジウムで副教授の方と再会して、いい仕事をし、活動しておられる事を知り非常に嬉しく感じました。

長沙では張永健副教授、馬建設氏(日本語教師)と親しくなり、異常気候で38℃を2日も体験しましたが、楽しい時を過ごすことができました。

日本語：馬さんから10ヶ月間日本語を教えるに

てくれる人(中国語はできなくてよく、また専門の日本語教師でなくてよい)を探してほしいと言われました。米国人は数人いるそうです。なお、10万円程度の給与で1年間来日を望む日本語教師は多いとのことでした。彼は来年福井工大に来るそうです。

北京：飛行機は週3便のため21日には北京に向いました。まず有色金属総公司を訪問し、客員教授の件の責任者である外事局副局長鄧先生にお会いして、次のような事情が分りました。

(1) 大学及び研究所での指導の要望は変更なし。

(2) 外貨が少いため、当方の条件を入れられるような方をお願いして細々とでも続けたい。

(3) 受入れは大学(等)の側で決める。つまり、総公司はその仲介をする立場である。

こうした次第で、現状のままでは日本側が積極的に客員教授の派遣方策を考える必要があるか

と考えられます。

また総公司の場外事務局実習生所長は6ヶ月以内の期間で、実習生を日本が受入れることを要望され、受入の希望先があれば推薦してほしいと言われました。

相互理解・交流発展：中国は中文の報文が多く、日本では実体が知られていない状況から見て、専門分野の日中シンポジウムは非常に有効だと思いました。双方とも研究者が知り合えば、国際会議あるいは観光旅行の帰路立ち寄りも可能です。また、大学のゲストハウス等を利用すれば費用も大したことはないでしょう。少しずつ交流を広める努力が必要だと思います。

最後に訪中の機会を与えて下さった有山・田岡両先生始め諸先生並びに肥後事務局長に感謝いたします。

## 最近の中国科学技術・その他の動向

配列：事項見出(中国通信掲載月日-掲載ページ〔関連事項-掲載月日-ページ〕)

- ① 中華人民共和国外資企業法(4.15-13~16〔その一問一答, 5.16-10~4〕)
- ② 1986年度国民経済・社会発展計画案についての報告(4.17-2~17)
- ③ 第7次国民経済・社会発展5カ年計画('86-'90年)摘要(4.21-2~28, 4.22-2~29)
- ④ 中華人民共和民法通則…4.12公布…87.1.1施行(4.23-2~32)
- ⑤ 中華人民共和國義務教育法,'86.7.1施行(4.28-7~10〔その一問一答, 5.8-13~17〕)
- ⑥ 宋健氏、中国の科学技術発展戦略を語る(4.30-2~4〔宋健氏、國務委員に4.17-17~18〕)
- ⑦ 中国最大のパソコン・シリーズ、検定パス(5.2-12)
- ⑧ 「気功」習えば成績良くなる(現象学的気功学確立が当面の課題、銭学森氏指摘)(5.12-16)
- ⑨ 7・5計画で四大ブラウン管工場建設(年産-

750万本見込)(5.8-2)

- ⑩ 「本草綱目」の妙薬(麦飯石)、400年ぶりに発見(5.8-5,〔内蒙古草原に長寿村、天然薬石麦飯石のおかげ, 5.13-19; 麦飯石食品13種開発5.27-9~10〕)
- ⑪ 中国に盐湖資源大規模開発の条件備わる(5.6-9~10〔青海カリ肥料工場着工5.6-8〕)
- ⑫ 中国、希土類利用で世界有数の国に(5.14-5)
- ⑬ 國務院が研究機関の自主権拡大暫定規定を公表(5.14-7~9)
- ⑭ 初の国家科学技術進歩賞決定、ロケット「長征」3号など(5.14-9~11〔5.16-3~4〕)
- ⑮ 初のタンデム型静電加速器核物理学実験室が完成(5.14-13~14)
- ⑯ 清華大、外国と大学院生養成協力(暫定規定を定める)(5.15-12~13)
- ⑰ 中国の神経外科、世界のトップレベルに(5.16-10)
- ⑱ 2050年の1人当国民所得4千ドル鄧主任が目

- 標語る (5.22-14~15)
- ⑨織毛ガン研究で世界先進水準に(5.22-8~9)
- ⑩湖南に初の水稻原々種生産基地、豚の成長促進用複合添加物検定パス (5.26-7~8)
- ⑪中国の自動車市場に新動向、小型トラック、国産採用車が先行好調 (5.26-10~11)
- ⑫中国、世界の主要産金国に (5.26-11~12)
- ⑬中国南極研究学術委員会設立(5.26-12~13)
- ⑭中国初の生物工学実験基地着工、10月に国際生物工学技術展 (5.27-3~4)
- ⑮NMOS 64キロビットD・RAM製作(5.27-9)
- ⑯大型プラント設備400基、機械工業7・5計画で国内生産へ (5.29-7~8)
- ⑰米航空機エンジンをライセンス生産(5.29-10)
- ⑱中国機械工業、向う5年間に技術導入800件、輸出は年平均24%増を目指す。(6.22-2~4)
- ⑲国産衛星テレビ受信局完成、農民の電話加入2万世帯突破 (6.2-15~16)
- ⑳中国科学技術協会の「2千年の中国研究」事業完了 (6.2-16~17)
- ㉑黄河横断バイブライン敷設に新技術(6.13-13)
- ㉒ホスゲン中毒治療、大きな前進、新型ガン治療器開発 (6.3-14~15)
- ㉓学位授与権限をもつ学科・専攻課程増加 (6.6-3)
- ㉔新しい胸腺ホルモン製剤開発 (6.9-7~8)
- ㉕マイタンシン合成に成功、上海薬物研、世界で2番目 (6.9-3)
- ㉖国務院、大学の管理権拡大を決定「高等教育管理職責暫定規定」公布 (6.9-9~10)
- ㉗「建設プロジェクトの中外共同設計暫定規定」公布 (6.10-3~5.〔外国との協力でプロジェクト設計・施工の水準向上6.10-5~6〕)
- ㉘重点基礎科学研究で成果-6・5計画期 (6.10-7~8)

本号記事索引(頁) 中日科技交流を強化(両国人民の友誼を深めよう 方毅国務委員(1), 第4回講演会 プログラム, 講演予稿(3), 日中交流ニュース: 中国科学技術協会第3回全国大会へ祝電(6), 北京二七機車工廠劉曉蘭女士の留学支援を終えて(6), 「統計物理・物性物理日中ワークショップ」に参加して(7), 中国訪問を終えて(8), 野上基金: ご寄附者芳名簿(10), 13年ぶりに中国を訪問して(11), 最近の中国科学技術 その他の動向(12), 野上基金にご協力を(13), 会告(14): I 本年度定例講演会に来聴歓迎 II 日中科学技術シンポジウム計画 III “ひとこと”お願い IV 本協会事業拡充のため, 会員加入勧奨に御協力を

## 中国の科学技術人材育成のために

一人でも多くの方に

浄財のご協力をお願い申し上げます。

「野上茂吉郎記念交流基金」(略称野上基金)発起人(五十音順)

有山兼孝 (名古屋大学名誉教授)	小沼通二 (岡山義塾大学教授)	伏見康治 (参議院議員)
岡本道雄 (科学技術会議議員)	近藤次郎 (日本学術会議会長)	藤本陽一 (早稲田大学教授)
奥田東 (京都大学名誉教授)	高木佐知夫 (東京理科大学教授)	向坊隆 (原子力委員会委員)
越智勇一 (麻布大学学長)	玉木英彦 (日科記念財団理事)	森田右 (東北大学名誉教授, 法政大学教授)
茅誠司 (東京大学名誉教授)	田村三郎 (東京大学名誉教授)	山口嘉夫 (東京大学教授)
久保亮五 (東京大学名誉教授, 岡山義塾大学委員)	並木美喜雄 (早稲田大学教授)	山下次郎 (日本大学教授)
森田雅男 (機械院奨励会会長)	橋口隆吉 (東京理科大学教授)	和達清夫 (日本学上院会員)

ご芳志の金額はご自由です。分割でも結構です。ご送金は、次のいずれかにどうぞ。

(1)銀行口座 「日中科学技術交流協会野上基金」 (2)郵便振替 東京0-13215

・住友銀行御茶の水支店 (普) 312658

・太陽神戸銀行赤坂支店 (普) 3236939

「日中科学技術交流協会」

備考欄に「野上基金」とご記入下さい。

4月16日~6月15日

ご寄附者芳名簿は

10頁に掲載してあ

ります。

## ◇ 会 告 ◇

## I 本年度(第4回)定例講演会に来聴歓迎

7月21日(月) 午後1時～5時(入場無料)

(本誌3頁にプログラム、講演予稿掲載)

- ①中国における科学技術の発展と国際交流  
演 ②原子衝突分野での日中交流  
題 ③地震学の日中交流10年  
④中国の水質保全と排水処理

(会場) 東京地学協会 地下鉄有楽町線麹町駅下車。  
千代田区二番町12-2 (番町出口改札を通り左側階段上)  
(03) 261-0809 9。出口より左側4番目のビル。

## II 日中科学技術シンポジウムの計画

○ 第1回('86年度)日中共同主催  
「化合物半導体シンポジウム」  
(中国科学院と共催・実施決定)

出席者: 日本側- 伊吹順章(摂南大), 生駒俊明(東大), 松村正清(東工大), 小川智哉(学習院大) 榊裕之(東大), 田島道夫(光技術共同研)以上6名講演題目と共に先方了承。

開催地: 北京, 滞在期間: 10月5日から約2週間, 会議後の訪問先は先方調整中, 中国滞在費は先方負担, いずれ本誌で別途紹介します。

## ○ 第2回以降 毎年開催

(概要) 日中双方が期待する専門分野について, プログラム概要(開催予定地, テーマ, 規模, 出席予定者, その他)を協議の上, 双方合意に基づき実施する。

'87年度分について, ご希望お知らせ下さい。

## ○ 本協会創立十周年記念のシンポジウム(東京開催)

明年11月中旬と予定して検討していますが, 上述に準じ, 専門・プログラム概要など, 適当とお考えのものをお申出下さい。

## III “ひとこと” お願い

明年の本協会創立十周年に向けて, 日中交流について, 皆様のご経験の中から……

あれは良かった, これはうまくいった, 今も順調, ポイントはこれ, あるいは, 悩み, 戸惑い,

あれは困った, これが判れば良かった……など。

また, 本誌の記事, 編集に関してのことでも……あなたの考え, 改善のヒントなど, ……………「横書き」でご氏名, ご連絡先と共に「ひとこと」, 同封の封とうでお送り下さい。

IV 本協会事業拡充のため  
会員加入勧奨に御協力お願い

厳しい現実 公益法人成立の暁には, これができる, あれもできるとの話が出され, ボランティア, 手弁当の大先生が一所懸命色々な構想を練られても, 実行性の保証は実難なしではムリな話です。—新しい芽は前頁にもあります。—

立派な事業を考えても, 企業は, 見返りもなく免税措置もなければ御協力はムリ, との答。また, 現実には貿易摩擦, 円高台風の影響が本協会にも及びつつあります。けれども, 本協会への中国側の強い期待や要望を裏切らないよう, いま頑張ることを迫られているのは確かです。

打開策? 当面は焦点を社団法人化にしぼり, まず会員の飛躍的增加を図るとの方針, それも裏付けの新規加入会員勧奨の実績が生れなくてはムリ—お互いに誰かがやってくれるとのお考えでは前進はない—鶏が先か卵が先かの話と同様です。協会再出発のために, 厳しい現実に向って, 難関を突破し, 法人化実現をご支援下さい。

あなたにお願い 「協会ご案内」も新しく印刷しました。新会員増募に何枚でもご請求下さい。この人に, この会社にと, あらゆる機会に御支援の呼び掛けを試みて下さい。

同封の紹介用紙その他のご連絡も歓迎します。

————— × × × —————  
本協会への①ご連絡(シンポジウム, ひとこと) ②新規加入会員のご紹介(連絡先・氏名・団体・企業名など) ③野上基金の資料請求などには……どうぞ同封の返信用封とうをご使用下さい。

連絡先: 日中科学技術交流協会 (03) 815-7241  
〒113 文京区湯島1-7-11 南新ビル6F